

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2023 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2024 年 3 月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1 年	張 威	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション学部 教授	奥野 克巳	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	中国福建省におけるウーロン茶の歴史、生態、政治経済をめぐる人類学的研究		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2024 年 3 月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程 1 年	張 威	
研究期間	2023 年度		
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 60,000 円 / (採択金額) 60,000 円		

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、茶の中でも、とりわけ中国福建省におけるウーロン茶に焦点を当てて、その歴史、生態、政治経済をめぐる人類学的な調査研究を行うことを目的とした。

茶は、動物や植物という他の生物種を排除し、チャノキのみを育てることにより、単一栽培されてきた。しかし、人間による生産管理が進められる中で、決して他の生物種は必ずしも排除されてきたわけではない。他の生物種は、自らのニッチを得て、フェラルなものとして生を存続させてきた。

こうした理解に基づき、ウーロン茶の生産の歴史的背景や中国国内での政治やグローバル経済の流れを視野に入れながら、4 ヶ月間の現地調査を含めて、マルチスピーシーズ民族誌/人類学の観点から、「人間以上の世界」における茶の動態を探ってみた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[茶/茶栽培] [フェラルなもの] [中国福建省]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 研究内容**

マルチスピーシーズ(多種の)人類学を牽引するアメリカの人類学者アナ・チン (Anna Tsing) らは、人間が、モノカルチャー(単一栽培)という農業の仕組みを築き上げる中で、多種を根絶し、単一種のみを飼い慣らそうと努力するが、そのことが達成されないうちに、余剰の部分として人間のコントロールを超えて、「フェラル(野良的)なもの」が生み出される過程に注目している (Tsing 2021; Besky 2019; 奥野 2022)。こうした「フェラルなもの人類学」は、時には、予期しない規模や範囲で自然が増殖し、その管理に人間が努力する事態を招いたり、または、周辺の生態系に影響が及んだりする事態に注目しながら、人間と人間以上の世界で起きていることのダイナミズムを、調査研究をつうじて描き出そうとする。

本研究は、「フェラルなもの人類学」の構想に基づいて、中国福建省において、ウーロン茶が、どのような生態的条件下において、どのような歴史的・政治経済的背景において栽培されるようになり、中国国内の政治やグローバルな経済の流れの中で、いかに発展・変化を遂げてきたのかを明らかにすることを目的とする。本研究は、文化人類学的なフィールドワークの手法に基づいて、福建省での現地調査研究を行いながら、研究を進めてきた。

2. 「フェラルなもの」の人類学

人類学者アナ・チンが、「フェラル(野良的)なもの」に焦点を当てたのは、2017年に発表された「完新世の復活に対する脅威は生存可能性に対する脅威である」(チン 2017: 57-61)と題する論考においてであった。彼女はその論考で、プランテーションのような、単純化された生態系で生まれ、かつ人間のコントロールを超えた「フェラルなもの」にはじめて焦点を当てた。その後、チンはニルス・ブバント(Nils Bubandt)とともに、共著論考「ポスト産業的な廃墟におけるフェラル・ダイナミクス—序論」の中で、「フェラル・ダイナミクス (feral dynamics)」という概念を提起している。「もし私たちが、ひとつの種として、私たち現代人が作り出した産業インフラを生き抜こうとするのであれば、研究者としての私たちは作られたランドスケープがいかに人間以上にリメイクされてきたのかを理解する必要がある。これらが私たちの言うフェラル・ダイナミクスである」(ブバントとチン 2018: 3)。

フェラル・ダイナミクスとは、人間のエンジニアたちの意図だけによるのではなく、人間以上の存在の交渉の次々に起きる影響によって生み出された、人為的な景観の動態である (ブバントとチン 2018: 1)。

さらに、その後、インフラを介して改変された自然に関する研究を進めるために、チンらは「フェラル・アトラス」という研究プロジェクトを立ち上げている (チン 2020)。インフラとは、社会的・政治的なプログラムの中に現れる、人間が作り出したランドスケープを改変するプロジェクトのことである。

様々な生物種は、人間が始めたプロジェクトとしてのインフラをメディウムとして、そこに住み着いたり、関わるようになっていく。自然は、インフラをつうじてリメイクされる。しかしその後、人間のコントロールを離れて、勝手に繁殖したり、独自に活動したりするようになる (チンほか 2020; 奥野 2022)。こうした「フェラルなもの」は蔓延することもあれば、逆に周囲の種や状況によって駆逐されて、消滅していく可能性もある。「フェラルなもの」の広がり、その後の人間との関わり合いを含め、事前に知ることができないため、それが調査研究すべき対象となる (奥野 2023: 230)。

3. 中国福建省武夷山における茶栽培の新たな野生

視察をおこなった静岡県川根本町の茶農家は近年、地理的特性による大規模な経営困難や高齢化、後継者不足、茶価の低迷など様々な課題に直面してきている。それらの影響を受け、茶園面積が全体的に減少し、茶園の放棄も散見されるようになってきている。そのことにより、害虫が繁殖したり、雑草がはびこって人の手では管理することができなくなったり、手に負えなくなるだけでなく、雑草の繁茂は周辺の茶園にも影響を与えてしまう。それが、茶園というインフラが放棄されることによって、リメイクされた自然、すなわち「フェラル」である。茶園におけるウンカ (Empoasca onukii) という「フェラルなもの」が増殖し、ウンカ、チャノキ、人間という多種が相互生成しながら、独特の香りを持つ茶が産出されてきている。

こうした日本の茶をめぐる「フェラル」の実態に対して、中国福建省武夷山周辺でも「フェラルなもの」の断片が見られる。武夷山は中国福建省の西北に位置し、その茶栽培の歴史は古く、1500年以上にわたって行われてきたとされる。武夷茶は、当初は薬草として利用され、後に飲料としての価値が見出され、唐代 (618年—907年) には、茶栽培や製造が本格的に発展した。この時期に茶産業が商業的な規模に拡大し、武夷茶が他の地域に広がり始めたのである。宋代 (960年—1279年) になると、武夷茶は、宮廷や文人、僧侶たちによって高く評価されたため、茶園の面積を拡大するようになった。そして明代 (1368年—1644年) から清代 (1644年—1912年) にかけて、茶をモノカルチャー (単一栽培) として栽培するようになった。しかし、1930年代頃に、世界経済の低迷や戦争、茶の国際競争の影響を受け、武夷茶の生産量は次第に衰退し、放棄茶園が広がってきている (蕭 2014; 中国茶葉博物館 2019)。

研究成果の概要 (つづき)

茶農家たちは、茶園の畝に大豆や菜の花を栽培することで、チャノキに窒素、リン、カリウムなどの栄養を与えてきた。多くは農薬を使わず、果物や野菜、糖蜜などで天然酵素を作り、茶園の土壤に散布して土壤の改良に力を入れている。これにより、土壤中の栄養分と微生物の数が増加し、チャノキの成長を促す。このようにして茶農家たちは、チャノキや土壤の管理に関する多くの経験を蓄積した土地で改良を行って、茶栽培における独自の「武夷農法」を形成してきた。

新中国成立(1949年)後、武夷茶は再び活力を取り戻してきた。国家が外貨を獲得するために、茶園は急速に発展し、生産規模も大幅に拡大するようになった。その時、「武夷山国営茶工場」が設立され、茶の生産、買付、販売のいずれもが国家の統一的な計画と管理に基づいて行われるようになった。しかし、上述したように、1930年代頃から、武夷山の茶産業の衰退により野生茶の収穫量は低水準となったため、武夷山に自生する野生茶が放棄されるという事態を招いた。チャノキの樹高はますます伸びるとともに、幹はコケ(*Barbella pendula*)で覆われるようになった。コケは水気の高い場所にしか生育できない。水分を蓄える機能を持っているため、それにはチャノキの水分を保つだけでなく、チャノキの生育を促すことができるという特性がある。

コケこそが、茶園というインフラを介して生まれた「フェラルなもの」に他ならない。その後、コケ、チャノキ、人間という多種が相互に関係を築く中で現在、「縦味(チョンウエイ)」という独特の香りを持つ「エコ茶」が産出されるようになってきている。縦味とは、チャノキが数十年または百年以上の成長過程で蓄積され、コケによる変化した味のことを指す。コケや木という味がすると評判がある。他方で、エコ茶市場の成長の過程で、コケの味を真似て化学物質で茶に付加価値を与える業者が出現し、消費者をだまそうとする問題も出てきている。政府は、茶市場を混乱させないために、政府は現在偽「エコ茶」の生産販売を規制している。

それぞれの国と地域で、茶栽培というモノカルチャーやインフラを介して生み出された「フェラルなもの」を再利用することで、茶に新たな付加価値を与える試みが進行中であり、それに伴う様々な問題もまた出てきている。インフラを媒介として新たに生み出された自然の中で関係性の動態だけでなく、「フェラルなもの」が生み出す政治経済にも目を向けて今後調査研究を続ければ、人間を含めた人間以上の世界で起きている環境生態の変容のダイナミズムに接近する新たな手がかりが得られるだろう。

参考文献

Bubandt, Nils and Tsing, Anna. 2018. Feral Dynamics of Post-Industrial Ruin: An Introduction, *Journal of Ethnobiology* 38(1): 1-7.

Tsing Anna, Jennifer Deger, Alder Keleman Saxena and. Feifei Zhou 2020. *Feral Atlas: The Morn-Than-Human Anthropocene*. Stanford University Press.

奥野克巳(2022). 「人間以上にリメイクされる自然——『マツタケ』以後のアナ・チン、フェラルなものの人類学」『思想：マルチスピーシーズ民族誌』103-121頁、岩波書店。

中国茶叶博物馆(編)(2019). 『中国茶事大典』中国农业出版社。

萧天喜(編)(2008). 『武夷茶经』科学出版社。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① なし

② なし

③ なし

④ その他

< 学会発表 >

「フェラルなもの」としてのコケ：中国福建省武夷山における茶栽培の新たな野生、日本文化人類学会第 58 回研究大会、2024 年 6 月 15～16 日、於：北海道大学（発表予定、査読あり）。

< 英語学術書の共訳 >

Chao, Sophie. (2022). In the Shadow of the Palms: More-Than-Human Becomings in West Papua. 奥野克巳・張威・田代周平共訳（英語から日本語へ、翻訳中）。

< 日本語学術書の単訳 >

奥野克巳 (2018) 『ありがとうもごめんなさいもいない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』張威訳（日本語から中国語へ、翻訳中）。